



特集 「新教科書」— これからの英語教育

『VISTA English Communication I』の編集方針

昭和女子大学 金子朝子

新学習指導要領では、科目構成が再編され、現行の「英語 I, II」と「リーディング」は、「コミュニケーション英語 I, II, III」が引き継ぎ、4技能の総合的・統合的育成を図る。さらに「コミュニケーション英語基礎」が中学校の学習の定着を図る目的で新設された。また、現行では「オーラル・コミュニケーション I」(2単位)か「英語 I」(3単位)のどちらかの選択必修であるが、新学習指導要領では「コミュニケーション英語 I」(3単位)1科目のみの必修となった。

VISTA English Communication Iは、以上のような改訂を受けて、必修の「コミュニケーション英語 I」の教科書として編集したものである。ここでは、新「VISTA I」の編集の基本方針と内容の特徴などについて述べてみたい。

(1) 編集の基本方針

新「VISTA I」は、VISTA創設以来の「英語の学習を通して、ことばと人間や社会との関係など、広くことばへの関心を高め、ことば・文化・民族の多様性とその共存、自然と人間の共生の大切さを学ぶ」教科書作りを、その基本方針としている。加えて、新学習指導要領では、中学校の学習の定着を図るために「コミュニケーション英語基礎」が新設されることを配慮して、その内容もカバーできるものとなるように留意した。

(2) VISTA I の特徴

① グローバルな視点

グローバルに世界の様々な文化を学ぶとともに、ローカルに自国や地域の文化を再発見して、地球とそこに住むものとの共存、共生を考える視点を大切にしていく。新学習指導要領にもあるように、外国語のしくみやその言語の背景にある文化に対する理解を深めることは、日本語や日本の文化に対する理

解を深め、広い視野や国際感覚、国際協調の精神を備えた人材の育成にもつながるものである。

グローバルな視点を取り入れるために、題材の選択は最も重要である。VISTA Iの12レッスンの題材は、自然環境保護、(海外での)日本文化、(英語圏以外も含めた)世界の国々、社会貢献、夢の実現、自然界から学ぶ科学、ことばの力、などバラエティーに富み、しかも、生徒の興味、関心と呼ぶものを揃えている。

② 興味、関心と呼ぶ内容を「わかる」英語で

たとえ、英語に対して苦手意識があり興味が薄い生徒でも、教科書を「開いてみよう」と思い、読んでみたら「わかる」と思ってもらえる教科書、つまり、英語学習への動機付けを高める教科書作りを目指した。

そのポイントは、生徒に関心を持ってもらえる題材や話題性のあるテーマと、教科書の構成の工夫である。関心と呼びそうな情報をできるだけ簡単な英語で書き下ろした。どんなにすばらしい内容の教科書でも、どんなに上手に教える教師がいても、まず、生徒が開いてくれる教科書が必要である。「開く→見る→英語を読んでみる→わかる」の連鎖が起こるような教科書となっていることを期待している。

例えば、Lesson 4からの各レッスンの初めのページは、日本語での導入(英語版は指導書にサンプルがある)と、そのレッスンの内容を想像しやすいように大きな写真を載せたWARM UP!となっている。日本語でいくつか質問があり、写真にまつわるやさしい英語を聞いて解答する。各レッスンは3セクションに分かれ、セクションごとにreading pointが提示されている。また、1レッスンで扱う文法は1項目だけに絞ってある。本文中の新出文法にはマークを付け、本文の後の文法解説(STUDY IT!)が参照できる。さらに、各セクションには内容に関する

英語のQ&Aがそれぞれのページにあり、内容理解の手助けとなる。また、発音は今回から発音記号とカナ発音を併記することとした。一般の中学用の辞書では既にカナ発音は用いており、発音記号に馴染みのない生徒への配慮からである。

③ 基礎・基本の定着

中学校での指導内容との円滑な接続を希望する現場からの声は大きい。VISTA Iは、生徒の実態に応じ、「コミュニケーション英語基礎」もカバーできるように、特に文構造や文法事項について中学校の指導内容を再整理すること、また、高校からの新しい学習事項は繰り返しその要点を学習することができる構成とした。

中学校の基礎復習は、Part 1 (Lesson 1~3)で行う。Be動詞と一般動詞の現在形、及び、その否定、疑問文と、現在進行形、助動詞can, will、過去形を、本文との見開きで学ぶことができる。すべての基礎となるこれらの事項を、ここでしっかり押さえてもらう。

Lesson 4以降では、前のレッスンの新出文法は次のレッスンで必ず繰り返すように配慮してある。これまでの教科書は、ある文法事項を一度学ぶと、その後全く使われなかったり、忘れた頃に出てきたりすることが多かった。VISTA Iでは、同じ文法事項を次のレッスンの違うコンテキストの中で繰り返し用いることで、生徒から「前のレッスンで勉強したな」という気づきを促したいと考えている。

④ コミュニケーション能力の育成

新学習指導要領の改善事項の一つは、生徒が英語に触れる機会を充実する方針にある。多様な場面における言語活動を経験させながら、「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能を有機的に関連付け、総合的にコミュニケーション能力を育成することが唱えられている。

VISTA Iでは、より豊富な英語のインプット、インタラクション、アウトプットの機会を作るように配慮した。インプットとして「聞く」機会を豊富にするために、各レッスンの導入のWARM UP!ではやさしい英語のイントロがあり、本文の後のPRACTICE!でも必ず新出の文法事項をターゲットとしたリスニング問題を配置した。また、「読む」インプットとして、Reading Skillのコーナーを置き、英文を正確に読むコツを学ぶ。インタラクションの

機会としては、本文の各セクションにあるQ&Aを使って、教師と生徒間や生徒同士で、英語でのコミュニケーションが可能である。PRACTICE!には、必ず英語で情報交換を行う練習がある。さらに、ENJOY COMMUNICATION!のコーナーでは、英語を使用する場面を想定して、その場面でよく用いられる表現を中心に会話をする。生徒の実態に応じて、4技能を組み合わせて活用して欲しい。アウトプットの機会としては、「話す」ことは、インタラクションで補うことができるので、特にやさしい英語で「書く」機会を増やした。まず、各レッスンの後にTHINK!のセクションを置いた。ここでは、本文の内容を統合的に考えてもらうPISA型の問題に答え、それに基づいて、本文の内容を英語でまとめる穴埋めを行う。英語でアウトプットを行うためには、話したり、書いたりするためのアイデアが必要である。単に本文の一部をコピーして穴埋めをするのではなく、本文全体で一体何を言いたいのかを掴んでから、英語でまとめを行うという趣旨である。また、USE ENGLISH!のセクションをレッスンごとに置き、説明する時の表現、褒める場合の表現など、言語の機能に配慮しながら、それぞれのレッスンの内容に関連した事柄について、英語で話したり、書いたりする機会としている。

(3) 文法の扱い

前項(2)③の「基礎・基本の定着」で述べた通り、VISTA Iでは、中学校で学習した文法事項の基礎復習・確認のためにLesson 1~3を準備しているが、これに加えて、本文に入る前に「ののちゃんの英文法—基礎を学習しよう—」を掲載した。ここでは、主語、be動詞、一般動詞、目的語、形容詞、副詞、前置詞、冠詞を取り上げ、文法の基礎の基礎を復習する。高校では、中学で学んだ5つの文の構造をさらに展開して、より複雑な文構造を学ぶことになるが、「ののちゃんの英文法」のねらいは、文を構成する1つ1つの要素についてもう一度確認することにある。生徒の理解の程度に合わせて活用してもらいたい。

Lesson 1~3は、中学の文法の復習が大きな目的である。さて、今回の改定では「コミュニケーション英語 I」がすべての生徒の必修となり、学習指導要領にある8項目の「文法事項」のすべてを「コミュ

コミュニケーション英語Ⅰ」で取り扱うことになっている。つまりVISTAⅠでは、Lesson 4～12で不定詞の用法、関係代名詞の用法、助動詞の用法、代名詞のうちitが名詞用法の句および節を指すもの、動詞の時制などについて、中学校で学習した基礎に加えてより幅広く学び、さらに、高校で初出の関係副詞の用法、仮定法、分詞構文も学ぶことになる。

VISTAⅠでは、できるだけ運用度が高い文構造や文法事項をまずSTUDY IT!で確認したあと、PRACTICE!で言語活動を行いながら学べるように工夫した。高等学校で初めて出会う文法事項については、使用が典型的である例にのみ焦点を絞って指導することとしている。

(4) 語彙の増加

VISTAは、生徒にわかりやすい英語を目指すため、これまでは語彙数もある程度制限した編集とされていた。しかし、今回の学習指導要領の改訂で、中学で学ぶ語彙が300語も増えた影響は大きい。「コミュニケーション英語Ⅰ」では400語、Ⅱ、Ⅲでは各700語が新出となり、中学と高校を合わせて、これまでの2,200語から一気に3,000語を学ばなければならない。中学に上乘せる語彙数は400語で現行と変わらないが、実は中学での履修語彙がすでに300語増えているので、「コミュニケーション英語Ⅰ」で用いる語彙レベルはどうしても高くなる。

新VISTAⅠでは、本文の各ページの新出語彙数は、人の短期記憶が7±2であることを考慮して、多くても9語までに抑えた。そのために400語の上乗せをこなすのはかなり難しい。速読用の読み物としてThe Little Princeをやさしく書き直したENJOY READING!や、楽しんで英語に触れてもらうためのTake a Break!、巻末のUSE ENGLISH!表現集にも新語が加えられている。

巻末の「WORD LIST」には語彙学習のための工夫がある。辞書を教室に持参しない生徒が多くなり、現場からの強い要望を受けて、簡単な辞書の機能も持たせた。生徒が学んだ語彙をチェックするのに便利のように、四角い枠のマークも付した。語彙リストも活用して、新しい語彙を積極的に言語活動に使って欲しいと考えている。

(5) 英語で授業

「英語で授業を行うことを基本とする」とは、教師が英語で授業を行うとともに、生徒も授業の中でできるだけ英語を使用することによって、英語による言語活動を授業の中心とすることを意味している。しかし、生徒の理解の程度に応じた英語で授業を行う配慮は重要である。生徒の理解度を把握して、簡単な英語を用いたり、ゆっくりと話したり、繰り返したりして、生徒が英語の使用に慣れるように指導をしていきたい。また、この規定は、英語で授業を行うことの重要性を強調するもので、授業のすべてを必ず英語で行わなければならない、ということではないことも確認しておきたい。

小学校5年生から「英語活動」を通して英語に慣れ親しみ、中学での言語活動を中心とした英語の授業を受け、高校に生徒が入学するのは、2016年のことになる。それまでに、生徒のレベルに応じて、少しずつ英語での指導の割合を増やしていくようにしたい。

授業中の教師の発話は大きく分けると、社会的目的で使うもの、授業運営の目的で使うもの、授業の内容に係わる中心的な目的で使うものに分類される。ひとつの提案としてまずは、社会的目的を持つ、授業の始めと終わりの挨拶や生徒との個人的な話のやり取り、そして、授業運営の目的で使う“Please open to page 10.”などのやり取りから英語を使う機会を増やしてはどうだろうか。新VISTAⅠでは、Get Ready!と題した教科書の本文に入る前のPre-Taskの1つとして、教師や生徒が授業で使う英語の表現集を掲載している。手始めに、ぜひここを活用して欲しい。

このように新VISTAⅠは、生徒が英語の基礎・基本を確実に身に付け、それらを活用しながら学習を進められるように、また、生徒の理解の程度に応じて、補足的な学習や、発展的な学習もできるように配慮して編集した。ぜひ、多くの先生方や生徒たちに活用していただけることを祈ってやまない。

